**鎌田　喜八 （かまた・きはち）**

**１、プロフィール**

青森県から戦後初めて投稿という険しいルートを通って、劇的に中央詩壇に登場した詩人。「詩学」新人賞、第一回土井晩翠賞受賞。戦後詩の最深部に到達した一人。「歴程」同人。

＜生没＞

1925（大正14）年12月28日 ～ 2016（平成28）年６月８日

＜代表作＞

詩集『エスキス』

＜青森との関わり＞

青森市大字浪打字造道生まれ。橋本小学校、浪打高等小学校卒。1961（昭和36）年まで在青。

**２、作家解説**

鎌田喜八は、1954（昭和29）年１月、西平内国立療養所時代の詩誌「プシケ」の詩友など少数を集め､「圏」を創刊｡1960（35)年11月58号まで､ガリ刷りで月刊を持続した｡「圏」は戦後現代詩の勃興期を背景に､広く県内の若手詩人志望者を迎え入れ､鎌田はそのうちの幾人かに深い影響を残した｡彼は「圏」に名作「エスキス」を連作し､驚くべき集中力によって以後の20編を含め､７年間ほとんど休みなく約70編の粒選りの秀作を発表し続けた｡そしてその凝縮された営みによって､その頃の東京詩壇に少なからず衝撃をもたらした｡その間､青森を去るまでに､戦後初めて全県的な詩人の組織作りのために県内を行脚｡1959（昭和34）年､青森県詩人協会の発足を実現した｡1960年代､鎌田は主に「詩学」「現代詩手帖」に作品を発表収録し､戦後詩に特異な妖光を放つ詩人として､欠かすことのできない位置を占めた｡その後､1973（48）年、旧「圏」同人たちと共に青森市に「胴乱」を開き、作品「光景」他を制作、その妖しい観相の仙境を更に奥深く分け入っていった。

鎌田喜八の全貌をひとくちに言い当てる事は難しい｡特色はというと､やはり言語の絵画化詩人と言えるだろう｡彼の特技は、人間存在の深層風景の諸相を、透視、分析、解体の手続きに従って、或る時は冷静な臨床医となり､また或る場面ではミスの多い私立探偵に扮し､緻密な描写の語り口によって絵画化､作像化してみせる事だ｡彼の想像力は文明の廃虚を好み､臨港引込み線路､月光のもとマンホールの下にくりひろげられる､迷宮の住人、生きものたちの隠微な宴を探り当てる｡彼の語法は異様なまでに知的臨場感に充ちている。

彼は言う。「詩的なものとは、いつも日常的な意味領域から溢れ出し、それとは別の場所に、自立的な言葉の世界を作り上げる」のだと。鎌田の想像力は脳宇宙や器官、五感のミクロの世界に潜入し、内視鏡的手法を用いて、存在機能そのものの不条理の劇を、体験的に語ってくれる。ミシヨウとの類似は超俗反文化という点にある。

**３、資料紹介**

〇『エスキス』

図書

1956（昭和31）年３月31日

185mm×131mm

鎌田ワールドの特異さとは何か｡それは戦後詩に初めて内的批評体様式の散文詩という､独自の手法光学を導入し､実存の周りの始源認識を絵画映像的に､限界近くまで追及開示した点だ｡その語法は生態触手的であり、観念と記号との不可避な迷路は危険が一杯だ｡